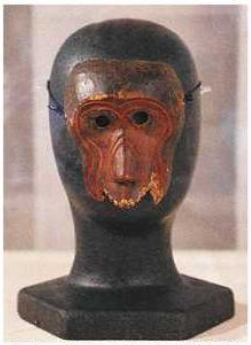
2023年11月17日 中日新聞 朝刊 26頁

天竜・横山「幻の祭礼」
神仏分離で廃れたか

静岡文化芸大 二本松教授ら解明

浜松市天竜区の横山八幡神社で長年営まれ、1874（明治7）年に突然途絶えた「幻の祭礼」がある。祭礼に用いられた面が同区の内山真龍資料館に残っているが、廃絶された事情は明らかでなかった。静岡文化芸術大の二本松康宏教授らが解明に乗りだし、明治維新後の神仏分離政策が背景にあることが分かってきた。（柳昂介）



展示されている「猿面」

上祭りで使われていた面の説明をする静岡文化芸術大の二本松康宏教授（右から3人目）　下横山八幡神社での祭礼で使用されていた「翁系の面」＝いずれも16日、浜松市中区の静岡文化芸術大で

面などきょうから公開

調査の手掛かりとなったのは、天竜区出身の国学者内山真龍（1740～1821年）が1789年に記した「遠江国風土記伝」。面を使った祭礼はかつて、観音を前に営まれていたとの記載があった。二本松教授は「鎌倉、室町時代から続いていた」と推測する。

横山八幡神社や資料館に観音がないため、二本松教授や学生らが周辺を調査。横山八幡神社から徒歩5分ほどの寺院「宝珠院」に11面観音があった。寺の関係者に聞くと「横山八幡神社との関係は分からない」との返答。寺の古い資料を引っ張り出してもらうと「村民たちが協議して、明治7年に横山八幡神社から宝珠院に観音を移した」との記述が見つかった。

二本松教授は「明治維新後の神仏分離政策による廃仏毀釈の影響で祭礼ができなくなった」と分析する。内山真龍による国学の影響もあり、横山地区でも仏教が排斥された可能性が高いといい「廃仏毀釈の中でも自分たちの信じてきたものを何とか残したいという思いで、住民たちがひそかに観音を守った」とみる。

面を使った祭礼は、北区引佐町の川名ひよんどりや長野県南信地域の霜月神楽、愛知県奥三河地域の花祭など、三遠南信地域に多く残る。二本松教授は、横山八幡神社の祭礼も三遠南信地域の他の祭礼に近い内容で、五穀豊穣を願った舞などが披露されていたと考えられるとして「天竜川や秋葉街道があり、三遠南信地域の文化や芸能の交流が多くあった」と語る。

◇

横山八幡神社の祭礼に用いられた面や鈴などが17日から22日まで、中区の静岡文化芸術大で特別公開される。面は11面あり、ドローンで撮影した横山地域の映像や地域の歴史を紹介するパネルなどもある。

午前10時40分～午後6時。18日には、二本松教授や仮面などを調査する宮嶋隆輔同大客員研究員らの講演がある。入場料や聴講料は無料。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています